

難民の医療援助のため南部アフリカのモンビークへ非政府組織(NGO)のAMDA(アジア医師連絡協議会、本部岡山山田)スタッフとして赴いていた土佐市民病院の看護婦、松本麻也さん(27)と土佐市高岡町甲丁のほど庵屋した。内職の激しかったモンビークでは日本の自衛隊のPKO活動を展開中だが、モンビークの松本さんにはよく映ったか。現地の様子を報告してゆきます。

私の見たモンビーク

土佐市民病院看護婦 松本 麻也子



張診器一本で診察

「まあ、広い」
高知から三十八時間、モンビークの首都・マントに着いたのは朝九時。狭い機内を出たばかりのせいか、見渡す限りのほらほら、広い大地がどこまでも広々感じられた。雨期に入る前で湿度が低く、朝の暑い夏を体験した私には快活な気持だ。

四月から現地入りして、AMDAスタッフの吉田修医師(左)と徳島県麻植田山川町へ合流し、悪戦苦闘の二週間が始まった。吉田医師は一人で、一本の聴診器とわずかな薬を頼りに患者を診察し、診療所の再建に取り組んでいる。吉田医師と村々を回り、診療の手伝いをするのが私の役割だ。

現地には強盗事件が頻発していて、外国人はたれも

栄養さえ取らせれば 治安悪く強盗事件も

殺された男。

ある集落では道路は閉鎖され、あちこちで炎が上がりつづいた。バスの運賃値上げに対する暴動で、行き交う車に投石をしていたようだ。自動小銃を持った軍隊が出動して鎮圧し、無事道路は開放されたが、多分これが続いているら日本に帰るのが遅れたかもしれない。

PKO活動で現地入りしている自衛隊員と兵卒、防衛庁長官とのレセプションに急ぎよ招かれて参加した後、私たちは車で約三時間かけ、活動の根拠地になるシヨクエ県へ。でっかい道の途中、両わきにはトワモロコシ畑や難民の家々が見える。わりと土でできた小さな家はかりだ。彼らは木を切り炭を作って売し、生計を立てている。

無力さに歯を食いしばる。漏遷難民の集まる村を訪れると、子供が集まってきて笑顔で迎えてくれる。子供らの多くは全身に斑点(はんてん)ができるほど疥癬(かいせん)にかか

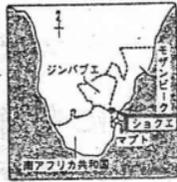
<上>

っている。一人がかかっているご家族が感染している。

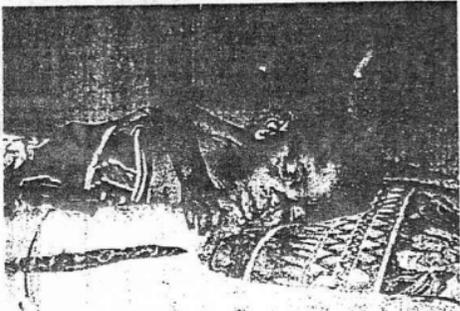
「いっしょを食べているの」
「メイヌ(トワモロロシ)だけ。半年前から子供が夜中にかゆい、かゆいと泣き叫ぶのや」
四歳と六歳の姉弟を持つ母親はしきりに訴えるが、私たちは返す言葉がない。トワモロロシだけでは抵抗

力もなくなり病気に負けてしまいが、現金収入のない難民に「栄養のあるものを食べればよい」とは言えず、衣服や寝具の煮沸消毒もできないので連れて行かない。

「何もできない…」
今にも消えそうな命が目の前にあっても助けられがけない無力さに、私たちは歯を食いしばるばかりだった。



南アフリカ共和国



マリアアで入院。点滴をうける幼児。2日後には元気になり母乳を吸うようになった。
(シヨクエ県・マジンシール村の中央病院)